



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ベルクソンにおける記憶と身体
Author(s)	大小田, 重夫
Description	
Citation	哲学, 35, 21-36
Issue Date	1999-07-18
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47999
Type	departmental bulletin paper
File Information	35_21-36.pdf



ベルクソンにおける記憶と身体

大小田重夫

はじめに

われわれの経験はたとえ以前見たものと同じものを見ているとしても、本当は常にどこか新しい。われわれはそれに気づくことなく日常的な生を送り、「恒常的なもの」、「安定したもの」をわれわれの生活の基礎と見なし、それに対して「変化」を特別なものとする。日常が大きく様変わりする瞬間われわれはようやくその変化を意識する。ベルクソンはわれわれの日常的な意識を逆転させる。彼は安定した見かけの背後に常に生成変化する世界を見ていた。

チック、タックという時計の音の反復について考える。物質のみに関していえばこれが二度目で、次が三度目だと言うことはできない。物質は過去を反復するだけだからである。しかしわれわれにとっては一度目のチック、タックと二度目のチック、タックとは同じ意味を持たない。われわれの精神にとっては二度目のチック、タックは一度目のチック、タックと溶け合って新たな印象を生み出し、三度目のチック、タックを予期させる。

このようにわれわれのうちには過去をその都度の現在と綜合する能力が存し、こうした能力のゆえに、われわれは習慣を身につけることができるのである。習慣は、その後到来する同じ状況に対して以前と同じ意志の労力を費やすことなく同じ応答をなすことを可能にする。われわれの身体が多くの習慣を身につけ、物質の惰性から解放されることができるの

は、身体自体が過去を縮約する作用である一つの記憶力であるからに他ならない。身体は一つの「原初的な習慣」としてあり、生理学的な身体に還元されてしまうものではない。ベルクソンは生理学に還元不可能な記憶の自律性を主張する。

一般に記憶力とは現在において過去を反復、再生することを役目とする特定の能力のことである。しかしベルクソンは「記憶」を「存在が事物の流れのリズムから自由になって、より過去を保持することによって、未来にますます強く影響を与えることを可能にするある内的な力」(MM. 355)と規定する。J・イポリットはベルクソンのこうした「記憶」を未来をめざす、過去と現在の総合である「創造的な持続」と規定する⁽¹⁾。同じものの再生や反復である通常の意味での「記憶」と全く新しいものを生み出す「創造」。イポリットの規定においては両者が結びつけられている。行動するために思惟するわれわれのような存在のうちには、へ動的なものよりもへ静的なものへを、へ進行(progres)よりもへもの(choses) (MM. 135)を思惟の基本に据えようとする不可避の傾向が存する。われわれが「記憶」を「創造」と語ることには違和感を感じるのは、「記憶」ということで、表象化されたへもの(choses)としての「記憶内容」を考えるからである。

記憶の局在説は、へ進行へよりもへものへを思惟するわれわれにとって不可避の傾向に従順なままであるがゆえに、記憶が痕跡として脳のうちに保存されているとみなす。ベルクソンは局在説を採用する科学的思考が、真の意味での記憶として自由に進化する人間を物質同様に扱うと批判する。しかし、たとえ記憶の局在説の生理学的説明を斥けるとしても、われわれは未だベルクソンの直観から遠いところにいる可能性がある。なぜならば個体的な記憶内容がこんどは脳のうちではなく、心と呼ばれるどこかの場所にすっかりできあがって「もの」として存在していると見なしているかぎりには、局在論と選ぶところはないからである。ベルクソンの記憶の理論は習慣としての力動的身体のうちで理解されない限りは、硬直した記憶理論となってしまう。

本稿の目的は『物質と記憶』における再認の問題を習慣という側面から捉えなおす作業をとおして、ベルクソンの記憶

と身体という両概念の内実を明らかにすることである。

Ⅰ 記憶の二つの形態と身体

意志、知性、想像力などの意識のさまざまな働きとの区別は、われわれが生活を営む深さの高低の区別に比べれば二次的なものである。『物質と記憶』はこうした意識の諸水準の区別という直観から始まる。

われわれの心理的生は、さまざまな高さにおいて営まれうる。あるときは行為により近く、またあるときは行為により遠く、われわれの生活の注意の度合いによつて。そこにこの書物の主導的な観念のひとつがあるのであり、それはわれわれの仕事の出発点にさえなったものである。

(MM. 7)

心理的生活はさまざまな水準において営まれうる。一方では行動へと向かい純粋な身体的運動へと至る方向があり、他方には純粋な観照へと至る逆の方向がある。われわれの心理的生活は、これら二つの限界を前提として、この二つの方向のどこかある水準に位置を占める。例えば、私がかつて自転車に乗れた日のことを思い出すとしよう。わたしは現在自転車に乗れているのだから、多くの人が自転車に乗るのを見たはずである。私の模倣の運動はたしかにそれらの他人が自転車に乗っている姿に導かれていた。しかしわれわれは現在自転車に乗るときにこれらの記憶を一つ一つ思い出すことはない。それらの記憶のすべては私の自転車に乗るこの行為のうちに収縮されて存在しているのである。

ベルクソンはいっさいの過去が存在していると考えている。しかしそれは「潜在的」にである。精神生活はさまざまな

水準で演じられ、その水準に応じて収縮する。現実化されうる記憶はそのレベルにある記憶のみである。

かつて自転車に乗れた日の記憶を探し求めに行くとき、私はある身体的態度をとることにより、現在から「過去一般」(MM. 148)へとさらには過去の特定の領域へと身をおくのである。誤つてはいけないのは、もし私がその記憶を現実化できるとしても、それは私が移行したその水準においてであり、記憶を現実化するのにもともと位置していた純粹行動の水準へと再び上昇する必要はない。そのように考えることは記憶の個性性を破壊してしまうことである。こうした記憶の現実化は身体的態度の変更による水準の移行をとおしてなされるのであり、意識の働きのみによつては不可能なのである。探し求める記憶が現実化されるのは、たまたま私の採用した身体的態度が適切なものであった場合のみである。

記憶は「運動機構」と、「人格的記憶心像」という二つの形式において存在している。自転車で乗るためにわれわれは何回も練習を繰り返す。いったん乗れるようになれば、それは「運動機構としての記憶」として獲得されたのである。またわれわれはこのような運動機構としての記憶が成立するまでの各々の練習を、それに付随する出来事とともに思い出すことができる。それは正確な日付と場所によつて規定される個性性を備えた記憶である。これを「自発的記憶(souvenir spontané)」(MM. 88)と呼ぶ。「運動機構としての記憶」はたとえ心の内で思い起こすだけでも、必要な身体の分節の運動を展開するだけの一定の時間を必要とするのであるからそれは運動である。他方で、「人格的記憶心像としての記憶」については、われわれはそれに任意の持続を帰することができるのであるから、それは精神の直観のうちに含まれており、したがって表象なのである。

ジャン・イポリットも指摘するように、議論の出発点に置かれたこのような記憶の区別は多くの誤解を招くものである(2)。一方に意識の内部にそれぞれが個性性を備えた記憶像の総体が、他方には「客観的身体」の運動が想定され、再認とは身体の運動によつて何らかの仕方では引き起こされる記憶の投射と見なされてしまふであらう。メルロ＝ポンティも

ベルクソンの身体が持続の一点をしめる「客観的身体」にとどまっており、身体と記憶が即自と対自のように截然と分かたれてしまい、身体が時間性を持った存在者として把握されていないと批判している⁽³⁾。しかし、記憶内容の局在説と同様にこのような一切の記憶を通覧しうるような「上空飛翔的態度」は具体的な経験に定位しようとするベルクソンの思考スタイルとは対照的なものであるということを取り急ぎ付け加えておく。

気まぐれに生ずる「人格的記憶心像としての記憶」よりも「運動機構としての記憶」の方が有用であるが故に、後者を記憶一般のモデルとして採用しようとする知性主義的な傾向がわれわれのうちに存する。後者は身体に刻み込まれた記憶であり、これが記憶一般のモデルと見なされると運動の座である脳のうちに記憶の根拠を見ようとする心理学的な記憶の局在説へと導かれてしまう。事態を外部から見ると、記憶の障害は意識の障害によるか、科学の対象としての身体の障害に帰着する。失語症のさまざまな事例はこうした伝統的な二分法に納まるものではない。ここから心身問題が帰着する。「運動機構」としての記憶と「人格的記憶心像」としての記憶の区別は多様な側面を持つ記憶という事態を単純化することなく、踏査しようとするベルクソンの周到な下準備なのである。ベルクソンは「客観的身体」と「精神」という空間的観点からなされた二分法が引き起こした心身問題を、「体験される身体」と「記憶」という時間的観点から把握し直すのである。ベルクソンは心身問題を「再認」の問題として捉えなおしたのである。彼の課題は再認のさまざまなケースを扱うことにより、その各々において身体と精神の役割を正確に見定めることである。ベルクソンの再認の議論を検討する前に、本節での批判に応えるために、ベルクソンの一般観念についての議論をみておきたい。

II 習慣としての再認（自動的再認）

「一般化するためにはまず抽象せねばならない。しかし有効に抽象できるためにはすでに一般化できなければならない。」（MMI. 297）これがベルクソンが言うところの「唯名論」と「概念論」が陥る一般観念をめぐるアポリアである。ベルクソンはこれら二つの立場に共通する要請を見いだす。それらはいずれもわれわれが個別的対象の知覚から出発することを前提としているのである。「唯名論」は類を枚挙によって作り出す。一方で「概念論」は分析によってそれを取り出す。枚挙と分析という操作はともに諸個体を前提とするのである。しかし、ベルクソンによれば本当のわれわれの出発点は個体の知覚ではない。そもそも一般観念の明晰な表象は知性の彫琢物であり、個々の対象の判明な区別は功利的な理由を持たない二次的なものである。われわれは一般観念や個体の知覚から出発するのではなく、「感じられ体験される類似」、「類似の漠然たる感じ」から出発するのである。反省はこの「感じられ体験される類似」を一般観念へと彫琢し、記憶はそれを具体的な個物の知覚へと変える。ベルクソンはここで「運動的習慣」、つまり、多様な状況に対して同一の反応をすること、個体的な差異を識別することとの間で揺れ動く「柔軟な記憶」について語っている。さらに反省の第一の形態がここに現れている。「感じられ体験される類似」とはもともととは、多様な状況における反応の同一性についての意識であり、それは運動の領域から思考の領域へと遡る自発的な働きである。精神はこの働きそのものを反省し、類の一般観念へと移る。こうした一般観念の形成とともに、われわれが冒頭で見た「進行」よりも「もの」を思考の基礎に据えようとするわれわれにとって不可避の傾向が生ずる。

こうした自発的な働きがそこなわれると、来たことのある場所だとはわかるが、そこで自分の進むべき方向を決定できなかったり、人から言われたことは正確に反復できるが、自分ではしゃべることのできないというような記憶の障害が生

じる。ここでは記憶の「心的な現実化」は保持されているが、それを有益な運動にまで延長する「機械的運動(mouvement mécanique)」がおかされているのである⁽⁴⁾。心的・言語的な盲目性と聾性が、記憶内容の存続を伴って存在するという事実から、ベルクソンは表象以前の水準である身体的行動が再認にとって重大な寄与をなしているという結論を導く。

われわれのなじみの道具はたとえ異なった状況で提示されたとしても常にわれわれに同一の運動を喚起する。ベルクソンはこの熟知の相を伴った知覚が引き起こす「機械的運動」、つまり習慣を「再認の原初的条件」(MM. 107-108)とみなす。彼は知覚と記憶の連合によって再認を説明する知性的な再認の理解に対して、このような「運動」が再認の基礎にあるという。したがって、「再認は思惟される前に演じられている」(MM. 103)のである。一般観念の起源である「感じられ体験される類似」とはさまざまな状況に対して身体によってなされる同一の反応の意識なのである。

以上のように発生論的観点からなされた一般観念の記述を再認の記述と重ね合わせてみることによって、前節の記憶の喚起をめぐる身体から切り離された「人格的記憶心像」としての記憶と「客観的身体」という二項図式がベルクソンの議論をかかなりの程度単純化してしまっていることがわかるであろう。われわれが目の前にあるコップを見て、特定の日付を持つ過去の何らかのエピソードを想起するとしても、それが可能なのは、われわれがコップをコップとして使用できるという条件において、つまり、個性性があらわれ出るのは一般性という地の上にのみである。ベルクソンの視点は、生物としての人間の基本的条件のうちにおかれている。

すでに再認において「体験される身体Ⅱ運動」が決定的に重大な役割を担わされていることが確認された。身体だけでなく「自動的再認」に続いてベルクソンは問題の核心である「注意的再認」へと移行する。「注意的再認」とは、意志的な記憶の喚起を含むものであり、ここでの心身の働きを見分けることこそが、心身結合を厳密に考える上で重要なのである。

III 創造としての再認（注意的再認）

例えば読書をしながらコーヒーを飲むという状況においては、コーヒーカップの絵柄はわれわれには重要ではない。コーヒーカップはコーヒーカップであるという意味においてだけ再認されればよい。しかし、そのコーヒーカップの知覚と同時に過去の何らかのエピソードを想起するとき、われわれの注意はおそらくそのカップの絵柄にも向けられているであろう。こうした意味で「自動的再認」における運動は対象の輪郭のみを強調するが、「注意的再認」における運動はわれわれを対象そのものへと導いてゆくのである。「注意的再認」の障害の多くのケースは記憶内容の完全な消滅を伴っているように見えた。そのため、脳に貯蔵された記憶内容の喪失が失語症であるという見方が伝統的に受け入れられることとなった。しかし記憶内容は消滅しない。「注意的再認もまた運動から出発する」(MM. 107)「注意的再認」の障害において記憶内容が完全に消滅したと思われたのは、ここで身体のなす運動が「自動的再認」とは違って、まさに記憶の心的現実化の条件となっているような「力動的運動(mouvement dynamique)」⁽⁵⁾だからなのである。

われわれの注意の働きは心理学者が考えるように生理学的なエネルギーの特殊な緊張によってなされるのではなく、第I節で論じたような身体の態度変更によるのである。注意が向けられた対象はその要素が機械的かつ偶然的な仕方次第に明るみにもたらされるのではない。注意の働きは精神と注意が向けられる対象を含む回路を構成していて、精神の集中度が増すにしたがって、それ以前の回路は徹底的に創造し直される。例えば、ある文章を言葉すらわからないでたんなる物理的な音声の連続体としてのみ知覚していたが、それがフランス語だとわかる瞬間、そこには私の身体的な態度変更が介入し、連続体としての物理的音声がフランス語として分節化される。さらにあるフランス語の詩を知覚するとき、最後にその詩にまつわる思い出とともにそれを知覚するとき、それぞれのケースにおいてわれわれの再認の度合いは異

なっており、知覚される対象は再認の深さが変わるごとに全般的に創造し直される。このとき身体は知覚される対象によって喚起された「模倣の運動」(MM. 112)によって、過去の記憶像と現在の知覚に共通の枠を提供する。

繰り返しになるがここでベルクソンが記憶のうちに過去の記憶像をあらかじめ仮定していると考ええることは、ベルクソンの真意を取り違えることである。連合論者の解釈と対照させることにより、ベルクソンの真意が理解されるだろう。連合論者は記憶中にすっかりできあがった詩の文というものを前提としている。生の知覚である音声の連続体のうちにその文の痕跡があり、それが「類似」や「近接」によって記憶のなかに特定の文章を探しに行くと考えるのである。連合論者は「もとのままの知覚」、「聴覚的記憶像」、「観念」をそれぞれ独立しているものとして仮定する。そして文の理解は「知覚」、「記憶」、「観念」という順序で進行すると考える。

しかし、このようにわれわれが受動的に音声を受け入れるだけであるとすると、なぜ音声の無数のニュアンスに同じ文の記憶を結びつけることができるのかは理解できない。文が文として知覚されるのは身体による「模倣の運動」によって現実化された記憶が知覚された音声に覆い被さったからである。たしかに記憶が現実化されるのは、知覚をきっかけとしてである。しかし現実化された記憶は知覚の対象へと回帰し、文ははじめて文として知覚される。文の知覚は「記憶」から「知覚」へとすすむ。

こうしてわれわれはベルクソンの言う「記憶」が単なる「記憶内容」の集積とはいかに異なるものであるかを理解できる。記憶のなかに眠っている文章というものは存在しない。私がある文の朗読を聴いてそれを理解したとき、私は身体の運動によって、私の潜在的過去一般を音声の知覚という現在の行動に縮約させ、ある文章として知覚された音声と回想化できる一つの文を含んだ記憶の一つの水準とを一挙に現実化したのである。それはある身体的態度によって決定された過去と現在との総合としての創造なのである。こうした意味で記憶のはたらかしは極めて現在ないしは未来に向けられている

のである。

最後に「自動的再認」と「注意的再認」の関係が問題となる。自動的再認は身体だけでやれる再認であるから、たとえ注意的再認ができなくなっても自動的再認だけが残ることがある(6)。問題は逆のケース、つまり、自動的再認が不可能であるにもかかわらず、注意的再認が可能かどうかである。第Ⅱ節で見たようにベルクソンは「自動的再認」を可能にする「習慣」を再認の「原初的条件」と見なしている。「自動的再認」は「注意的再認」を可能にする条件であり、「自動的再認」の働きがおかされている場合、「注意的再認」は不可能だと考えるのが適切であろう(7)。

IV 習慣と創造

記憶の局在説は第一に、進行である人間の生を既に過ぎ去ったものによって構成し直そうとする「回顧的錯覚」(8)を犯しているという点で、次に人間を部分の寄せ集めと見なし、外部から再構成しよう試みているという二つの意味で倒錯した思考なのである。しかし本当はわれわれの生自体が「記憶」そのものであり、部分の寄せ集めには還元できない一つの全体なのである。われわれはそれを表象化されるさまざまな「記憶内容」に置き換えてしまい、それでもって生を再構成しようとする。われわれが身につけている各々の習慣は、それらのうちにその習慣が獲得されるまでのすべての記憶を抱え込んでいる。しかしそれらの全記憶がそのままの形で保存されているのではない。それは一つの習慣のうちに収縮されて存在しているのである。また各々の習慣もゲシュタルトをなし、一つの「全体」としてのわれわれの多様な生を構成している。

メルロ＝ポンティは『見えるものと見えないもの』のノートで生が自らを振り返り己を捉えるときに陥るこうしたアポ

リアについて語っている(9)。

ゲシュタルトとは何か。部分の総和に還元されない全体である。というのは否定的で外的な定義である。

部分を語り得るためには、まずはじめにその全体が把握されていなければならない。したがってゲシュタルトの定義のうちに「部分」を持ち込むことはできない。こうした意味で「部分に還元されない全体」という定義は、そもそも定義になっていないのである。それではゲシュタルトとは何か。それは「外部」からではなく「内部」から、つまり実際にその生成を体験することによってしか近づき得ない何かなのである。身体は時を経るとともに、ますます多くの習慣を身につけて行く。悪い習慣から抜け出すためにも新たな習慣を必要とすることからもわかるように、習慣はわれわれの生の条件である。そしてそれらの習慣はさまざまな仕方で組織化され、生を多様化して行く。芸術家のなす「創造」もこうした習慣の独創的な組織化以外のものではない。

われわれは各々の現在をある度合いに収縮した過去と綜合することによって、このような新たな習慣の構造化をなす。メルロ＝ポンティはこのような既得のものが新たな意味作用へと収斂する過程を称して「首尾一貫した変形(déformation cohérente)」⁽¹⁰⁾と呼んだ。彼は習慣を積極的に評価した⁽¹¹⁾。それに対して、ベルクソンの視点はむしろ「習慣」の否定的側面に向けられていた。習慣は創造を可能にする一方で、われわれの行為を無意識のうちに遂行可能にする。それはわれわれを物質に近づけることである。したがってベルクソン自身は「習慣」を「創造」と関連づけて語ることはほとんどなかった⁽¹²⁾。しかし確認してきたように、われわれは「記憶」という概念の意味内実の空間的表象による汚染を認めなくてはならない。【意識の直接与件についての試論】(以下【試論】)において空間表象による汚染から解放された「時間」

をとりだしたように、ベルクソンは『物質と記憶』において「記憶」という概念にまわりついて、空間表象を除去しようとする。通俗の意味で記憶力とは現在において過去を反復、再生することを役目とする特定の能力と考えられている。しかし、こうした同じものの反復という定義はまさに等質空間そのものの定義なのである。空間的表象から解放された「記憶」とはイポリットの指摘するように「創造」なのであり、「身体の記憶」である「習慣」はまさに「創造」と関連づけられるべきものであろう。

まとめ

ベルクソンは『試論』において連合説的決定論を「言語によって欺かれて、粗雑な心理学(DI.12)とみなし、内的な生との合一をめざして言語批判を行った。持続は「相互外在性を持たない純粋な継起」であり、それに対して言語や身体を構成する物質の側には「継起することない純粋な外在性」がある⁽¹³⁾。

しかし、こうした言語批判はもちろん言語なしで思惟しようということ意味するのではない。ベルクソンは『思想と動くもの』の緒論において、直観は観念以上のものであるが、それが伝えられるにはやはり観念に訴えかけるしかないこと、哲学者も既存の言語でもって思惟しなくてはならず、「直喩(comparison)」や「隱喩(métaphore)」がここで重要な役割を演じることを主張する⁽¹⁴⁾。『試論』においてベルクソンは「時間」という概念のうちに、「空間化された時間表象」と「純粋な時間」という二つの本性的に異なった要素の混在を見いだした。そして彼は後者を「持続(durée)」と呼んだのである。『物質と記憶』においても「記憶」という概念のうちに二つの本性的差異を持った要素が分析された。ベルクソンは失語症研究の成果を反省の端緒として、「記憶」という概念のもとに、まさに等質空間の規定そのものである同じもの

の再生や反復である通俗的な意味での「記憶」と、全く新しいものを生み出す「創造」という二つの要素の混在を指摘したのである。こうした意味でベルクソンの言語批判は言語そのものに対する批判ではなく、空間的表象によってゆがめられた意味内容を有する言語の無批判な使用に向けられていたと言うことができる。彼は「時間」、「記憶」、「自我」などという概念の曖昧な使用を指摘することにより、既存の言語の内部にとどまりつつ、哲学の言語に新たな可能性を開いたのである。

ベルクソンは『試論』における「純粹な継起」つまり「相互外在性なき継起」と物質の「反復」つまり「継起なき相互外在性」との峻別から出発した。しかしわれわれは持続において物質と精神の両者に触れているのである⁽¹⁵⁾。そして両者はそこにおいて部分的ではあるが重なり合う。ベルクソンは事象につき従うことによって『物質と記憶』において両者の「部分的合致(coincidence partielle)」(MM. 250)である「純粹知覚」に到達したのである⁽¹⁶⁾。物質と精神は相互に還元不可能ではあるが、部分的に重なり合う。そこでは「知覚すること」がそのまま「行為すること」であり、再認は自動的なされる。物質と精神、つまり身体と精神は合一している。ベルクソンはこうした状態から出発し、そこに精神の能動性が介入し「知覚すること」と「行為すること」が相互に隔たっていく過程のうちに、つまり「自動的再認」から「注意的再認」の移行のうちに心身の具体的な関係を把握しようとしたのである。

純粹知覚を基礎に据える『物質と記憶』において、『試論』における「純粹な継起」つまり「相互外在性なき継起」と、物質の「反復」つまり「継起なき相互外在性」は両者のより深いレヴェルでの「部分的合致」という「根本的形式」からの派生形態として把握し直される。持続が「純粹な継起」であるのは相対的な意味においてでしかない。また物質が「反復」であるのも同様である。

メルロ＝ポンティはこうしたベルクソン哲学の移行を「印象(impression)の哲学」から「表現(expression)の哲学」への移

行と要約する⁽¹⁷⁾。彼によればベルクソンの思想の歩みは、ある物の絶対的認識を得ることは言語などの一切の媒介を排除することによって、そのものに合一し、そのなかにはいることなく、それを言語によって表現することなのである、ということを経くソン自身が自覚してゆく過程として把握されるのである。メルロ・ポンティの表現に付言して次のように言わねばならない。「表現の哲学」の契機もすでに『試論』の時期から存在していたのであるが、ベルクソンの決定論に対する批判の故に、つまり彼が言語や物質の存在に正当な意味を認めることができなかったがゆえに、「印象の哲学」の契機によって覆い隠されていたのである、と。

こうしたベルクソン哲学に対して、メルロ・ポンティは『物質と記憶』においてベルクソンが到達した精神と物質、精神と身体の「部分的合致」から出発する。メルロ・ポンティにとってそれは、ゲシュタルトの経験であった。ベルクソン自身は自分の哲学について、それは経験を「その根源において、あるいはむしろ経験がわれわれに役立つという方向に曲がることによって真に人間的経験になるこの決定的な曲がり角において探求する」(MM, 205)と主張している。それに対してメルロ・ポンティは「具体的経験」への復帰を説いた、と言われる。しかしわれわれはこうしたベルクソンのテキストを引用して両者の差異のみを言い立てるべきではない。なぜなら具体的経験を超出するにしても、それが可能なのは具体的な経験を出発点にしてのみだからである。われわれはベルクソンの哲学のうちに「具体的経験」に定位するという一貫した姿勢を見いだすことができた。「創造」としての「注意的再認」が「習慣」としての「自動的再認」によって支えられていたように、今まで語られてこなかった思考の外部について語ることができるとしても、それはあくまで既存の言語体系の内部からでしかない。ベルクソンはこのことを常に自覚していたのである。

注

ヘルクソンのテキストは引用に際して、以下の略号を用い、ページ数のみを示す。

DI: *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Puf, Paris, 1927.

MM: *Matière et mémoire*, Puf, Paris, 1939.

- (1) J. Hippolyte, *Aspects divers de la mémoire chez Bergson*, Figure de la pensée philosophique, tome I, Puf, Paris, 1971.
- (2) *ibid.*
- (3) M. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, p93, Gallimard, Paris, 1945. あるいは *L'Union de l'âme et du corps chez Malebranche, Maine de Biran et Bergson*, p90, BnF, Paris, 1978. なお『物質と記憶』のうちにはメルローポンティの批判に格好の言葉を与える以下のような表現が見られる。「私たちが諸事実からとり出し、推理によって確かめた思想は、私たちの身体が行動の道具(instrument d'action) それも行動だけの道具であるところから出ている」(MM, 253)
- (4) G. Deleuze, *le bergsonisme*, chapitre III, Puf, Paris, 1966.
- (5) *ibid.*
- (6) *ibid.*
- (7) *ibid.* ドゥルーズは記憶内容の現実化の四つの側面を置換・回転・力動的運動・機械的運動とし、機械的運動を記憶内容の現実化の最終段階と規定している。
- (8) H. Bergson, *La pensée et le mouvant*, p14, Puf, Paris, 1938.
- (9) M. Merleau-Ponty, *Le visible et l'invisible*, p258, Gallimard, Paris, 1964.
- (10) M. Merleau-Ponty, *Signe*, p68, Gallimard, Paris, 1960.
- (11) M. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, p93, Gallimard, Paris, 1945. 「習慣的身体を手に入れることは、最もよく統合された実存にとつての内的必然である」
- (12) H. Gouhier, *Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale*, p41, Vrin, 1989. グイエによれば、ヘルクソンがギリシャ・ラテンの伝統に距離を置いて、ユダヤ・キリスト教系の用語である「創造」という概念を積極的に使用し始めるのは、『創造的進化』以降である。
- (13) H. Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, p81, Puf, Paris, 1927. 「こうしてわれわれの自我の中には、相互外在的な

き継起があり、自我の外には、継起なき相互外在性がある。」

(14) H. Bergson, *La pensée et le mouvant*, p42, Puf, Paris, 1938.

(15) H. Bergson, *L'évolution créatrice*, p9, Puf, Paris, 1941. 「もし私が一杯の砂糖水を作ろうと思うなら、ともかくも、砂糖が溶けてくれるのを待たなければならない。」物質に適用される時間と、われわれの内的な持続が同調しないこうした時間の必然的な性格のうちにわれわれは物質の本性を感じているとベルクソンは考えるのである。

(16) Jean, Hyppolite, op. cit. ジャン・イポリットは『試論』から『物質と記憶』のベルクソン哲学の移行を、「われわれの自由の物質的存在への組み込み」という形で定式化している。しかし、執拗なベルクソン自身の言語批判にも関わらず、『試論』においてすでに、言語という物質は問題となっていたのである。したがってわれわれは、イポリットのように『試論』から『物質と記憶』の移行を、内的な持続から世界へ、次には身体へという「観点の移行」とみなさない。物質と精神の問題はすでに『試論』において「表層的自我」と「深層的自我」との関係という形で論じられていたのであり、『物質と記憶』への移行は、ベルクソンが自らの哲学の出発点とした内的持続という時間的観点からの必然的で内的な移行なのである。

(17) M. Merleau-Ponty, *Éloge de la philosophie et les autres essais*, p36, Gallimard, Paris, 1965. 「哲学は、自由と物質、精神と身体を別々に実在化し対立させることを本質とするものではないし、自由と精神といったものでも、物質とか身体のみのおのれを証言しなくてはならない、ということを経験することは知っていた。」